冒頭に挙げた三大要素に沿って説明してみるとよりイメージしやすい。まずはキャスト。体高を高くすることによって浮力を確保しつつ、丸みを帯びた形状のおかげできれいに水面をスキップしカバーの奥の奥まで入っていく。次にアクション。首を振らせることによってサイドのカップでスプラッシュを上げ、カレントのあるフィールドでもしっかりとアクションを殺さずにアピールできる。首振りがハイアピールと感じれば、ポッパーのような使い方でフロントカップを活かしてアクションさせ、タフな時でもバイトに持ち込める。最後にフッキング。スモールフロッグにありがちなフックゲイプの狭いフックではなく、このサイズのフロッグではトップクラスのワイドゲイプフックを使用しているので、すっぽ抜けやバラシのリスクがかなり軽減されている。

と、もしあなたがここまでを一気に読んでいたら、もうすでにフロッグ病に足を踏み入れてしまっている。このアイマフロッグをきっかけに是非どっぷりとその呪縛にとらわれてほしい。

そして現在もう二つ開発中なのがダブルプロップベイト。最近の日本では一字系と呼ばれる“水中をストレートリトリーブで攻略していくジャンル”として流行しているが、今開発しているのはスイッシャー。つまりトップウォーターだ。アイマプロップの最大の特徴はフラットサイドボディであること。それが一番の肝だ。ピンと来てない方も、これを読んだ後には必ず自分のフィールドに置き換えてイメージすることができるだろう。

僕のガイドフィールドの琵琶湖において、攻略のひとつのキーとしてブルーギルの存在が挙げられる。そう、ブルーギルを意識した形こそ、このアイマプロップ(仮称)なのである。

一番のタイミングはポストスポーンからサマーシーズン。ブルーギルがシャローでスポーンするタイミングにアイマプロップは大爆発する。バスのポストスポーンとちょうど重なることから、大型のメスはシャローに残り、スポーンで上がってきたブルーギルを捕食しながら回復していく。スポーン時のブルーギルはボディをくねらせて産卵する。このフラットサイドはジャークするたびに一定の方向にボディが倒れる。それがギルのスポーニング姿勢を模倣し、バスの食性にスイッチを入れるのだ。

また「音」も大事なファクターだ。ポッパーよりもソフトな音でプレゼンテーションできる。そしてオリジナルのプロップはしっかり水を掻きながらも心地よいサウンドを奏でる。この時期のバスは音に関しては両極端。すごく嫌う時もあれば、スポーン後の威嚇行動の名残として爆発することもある。食わせ、リアクションと両方の面から攻略することによって格段にバイトが増えていく。

当然オールシーズントップウォーターとしても優秀で、風や引き波でアピールが少ない時はプロップのサウンドによりアピールしてくれるし、ハイプレッシャーレイクでもそのサイズ感でバイトに持ち込むことができる。ブルーギルがいる場所限定というわけではなく、音という要素を意識して普段行っているフィールドで試してみてほしい。

Life & Fishing

Yukinari Uchiyama
内山 幸也

スモールフロッグ×ダブルプロップベイト ふたつのトップウォータールアーが、日本のバスフィッシングを面白くする。

「フロッグに憑りつかれた者はその呪縛から逃れられない」僕自身だけではなく、ガイドのお客さんやセミナーでお話しさせていただいた皆さんを見ても、そう断言できる。キャスト、アクション、フッキングとバスフィッシングの醍醐味が凝縮しているのがフロッグフィッシングであり、その三要素のひとつでも欠けてしまったらこの釣りは成立しないのだ。

今でも鮮明に覚えている2007年5月のレイクフォーク。アメリカ在住時にお世話になっていたバスマスターエリートプロの宮崎友輔さんが、この釣りを教えてくれた。

大半のバスはスポーンを終えたばかりのタイミング。数を釣るには一番楽しいシーズンだが、ビッグだけを狙っていくと難易度は途端に上がる。

スポーニングエリアにはグラスが生え始めており、一時的にステイするそのグラスにディスタンスをとってフロッグで攻めていくと、面白いように大きい魚のみをキャッチしていくことができた。狙ってビッグを獲れるベイトというのは少ないが、フロッグにはその可能性を感じた。

そこからはオールシーズンとにかくいろんなタイプのフロッグをアメリカと日本で投げまくった。自分がこの釣りをモノにできたと感じたのは2010年くらいだっただろうか。

だがまだその時点ではこのアイマフロッグ(仮称)構想は持っていなかった。2012年のフロリダで行われたフィッシングショーでの出来事、アイマブースで色々なプロと意見交換していると、あるトーナメントプロが某スモールフロッグを大量にオーダーしているのを目撃した。1人ではなく複数人、それもこっそりと。中には超トッププロもいた。そこで思い出したのは、2011年のガイドの時の経験だった。フロントでオリジナルサイズを投げていた僕は、リアにいるお客さんにも同サイズのフロッグを投げてもらっていた。2人ともバイトは無し。だが小さめのフロッグに変えた途端、同じストレッチで怒涛の入れ食い、しかも全てビッグサイズ…。自分自身の勝手な思い込みで「小さいフロッグ=魚のサイズも小さい」と考えていたことをとても恥ずかしく感じた。大きくても小さくてもフロッグはフロッグなのだ。

それ以降あらゆるフィールドで極秘にテストを重ねてきたこのアイマフロッグ。その特徴はスモールシルエット&ハイアピール。そして投げやすさとフッキング性能だ。少しノーズをとがらせ、スナッグレス性能を確保しながらも、口をポッパータイプにすることによって移動距離の短い首振りを可能にしている。当然ポッパーのような使い方もOK。

また他に類を見ない特徴的な両サイドのカップ形状は首振り時のスプラッシュによるアピールと水押しの強さが自慢だ。カバーを釣るフロッグにおいてはアピールの強さは絶対に必要だが、プレッシャーの高い日本の湖ではハイアピールなだけではバイトにまで持ち込むことができない。全体的なシルエットをコンパクトにすることによってハイプレッシャーのレイクでもバイトに持ち込め、琵琶湖でもフロッグのローテーションとしてしっかりと使用できる。スーパーシャローでは大きめのシルエットが嫌われるタイミングが必ずあるので、バイトがない時はこのアイマフロッグにスイッチしてみることをお勧めする。